

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：53801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00333

研究課題名(和文)「出雲国造神賀詞」神話の研究：平安朝初頭の祭儀神話としての考察

研究課題名(英文) Mytos of "Izumo no kuni-no-miyatsuko no Kamuyogoto": A Study as a Ritual Myth in the Early Heian Period

研究代表者

小村 宏史 (Omura, Hiroshi)

沼津工業高等専門学校・教養科・教授

研究者番号：50734688

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 400,000円

研究成果の概要(和文)：「出雲国造神賀詞」は出雲国造の新任儀に伴って奏上された祝詞である。その詞章内の神話的叙述は、他書に見えない独自記述を含み、出雲国造家の手による祭儀神話形成の意図を認めることができる。本研究は当該祝詞の神話叙述について、儀礼の文脈との関係性に注意を払いつつ、詞章内の独自記述を支える鎮魂概念、および詞章(特に独自記事)成立の基盤となる氏族関係の解明を試み、その成果を学術論文2編のかたちで公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「出雲国造神賀詞」奏上儀における神宝献上の背景に、物部氏の鎮魂観があることを明らかにした。これは、旧来内在魂の揺動や遊離魂の付着といった観点で説かれてきた古代の鎮魂観自体の再考を促すものであり、「神賀詞」詞章解釈の重要な前提となることはもちろん、多くの上代文献について新たな読み可能性を広げる意義をも有するものと認識している。

また、「神賀詞」固有の神話的言説である四神鎮座記事の検討を通し、物部氏・出雲氏の媒としての日置氏の存在を確認できたことは、古代の氏族関係に新たな光を照射することにつながると考える。

研究成果の概要(英文)："Izumo no Kuni-no-miyatsuko no Kamuyogoto" is a Norito that was chanted along with the Inauguration of Izumo no Kuni-no-miyatsuko. The mythological narratives in "Izumo no Kuni-no-miyatsuko no Kamuyogoto" contain unique descriptions that cannot be seen in other books, and we can recognize the intention of Izumo no Kuni-no-miyatsuko to form ritual myths. In this research, I paid attention to the relationship between the mythological description of "Izumo no Kuni-no-miyatsuko no Kamuyogoto" and the context of the presentation ceremony. Then, I clarified the relationship between the unique article in the "Izumo no Kuni-no-miyatsuko no Kamuyogoto" and the concept of "鎮魂". In addition, I presented a new view on the relationship between clans, which is the basis of the establishment of the verse. The results of this research were published in two academic papers.

研究分野：日本文学

キーワード：出雲国造神賀詞 出雲国造 先代旧事本紀 鎮魂 出雲氏 物部氏 日置氏

1. 研究開始当初の背景

出雲国造(出雲臣)は令制下においても国造職を世襲し、出雲の祭祀を司ることを認められた特殊な存在である。その新任の際には上京し、天皇の大御世を寿ぎ祝う「出雲国造神賀詞」を奏上し、あわせて神宝献上をも行うこととなっている。当該儀礼は他の律令国造にみられない出雲国造の特殊性を示すものとされ、多大な研究の蓄積がある。だが「神賀詞」詞章自体については、史学では儀礼の本義および成立時期を考察するための、文学では記・紀や古風土記などの文献読解をするための、いわば補助資料としての価値に限って認められるに過ぎなかった。結果、奏上儀礼の意義解釈が諸説乱立する一方で、詞章における神話部分自体への考察は十分でない状況にあった。「神賀詞」奏上者・出雲国造が神話という言説を用いて何を喧伝しようとしたのか、その意図が問われねばならない状況にあったといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現伝「神賀詞」詞章の神話的言説の分析を行い、そこに託された出雲国造の意図を見定めるところにある。解明にあたって、以下の観点を重視した。

(1) 現実をみすえた神話という視座:「神賀詞」奏上儀式の詳細は、10世紀初め成立の『延喜式』から知るほかないが、正史における奏上記録・献上品の内容から判断して、その儀式次第に整備されたのは9世紀前半と考えられている。故に、平安時代初頭の社会状況をふまえた、現伝「神賀詞」神話的言説の検討が求められる。

(2) 鎮魂 概念の再検討:「神賀詞」のオホナムチは、出雲国造の祖神の「媚び鎮め」により王権に帰順したと語られる。祭祀者として神の御魂を懐柔し鎮めたものと解されるが、ここで注意されるのは古代における鎮魂概念との関係性である。いわゆる鎮魂の語義については伴信友『鎮魂伝』(1846年)以来、魂を身体から遊離しないように防ぎ身体の活力を盛んにすること、または外来魂を憑依させること(折口信夫「大嘗祭の本義」1928年)などと解されている。だが、渡辺勝義(『鎮魂祭の研究』1994年)の指摘するとおり、宮廷祭儀たる鎮魂祭が天皇の病氣平癒のために執行された例は正史に見えず、『日本後紀』延暦24年2月庚戌条には、鎮魂の対象を天皇でなく石上大神と記す例もみえる。「神賀詞」の記事は、荒ぶる神の御魂を鎮めるという点で、延暦24年の事例と通う面を有し、通説化した鎮魂観では読み解けない可能性を含む。

上述の2点をふまえ、祭儀に与る氏族・出雲国造が、奏上時の現実をいかにみすえ、一族のアイデンティティの起源をいかに定位していったか、文脈の詳細な検討を通して解明した。

3. 研究の方法

本研究においては、儀式のコンテクストを考慮した「神賀詞」詞章の読解、「神賀詞」独自記述を支える出雲国造の祭祀概念の検討、「神賀詞」詞章成立の基盤となる氏族関係の解明、という3点を中心に、調査研究を進めた。

令和2年度は、おもににかかわる研究史の詳細な把握と資料確認のため、国立国会図書館、国文学研究資料館等で文献調査を実施した。また、従来言及されることのほとんどなかった、「神賀詞」奏上儀礼の神宝と『先代旧事本紀』(物部氏の氏文)の語る「天璽瑞宝十種」との類似性についての意義解明をすべく、過去に研究分担者として参加した共同研究(基盤研究C15K02236「『先代旧事本紀』の総合的研究」研究代表者:工藤浩)で構築した人脈を活用し、助言を得ながら考察をすすめた。その成果は論文として査読誌に投稿し、翌年度公表された。

令和3年度、4年度は、上述にかかわる調査研究を中心に行った。出雲氏と国造制度、神

祇制度との関係、および物部氏・日置氏ら祭祀関係氏族とのかかわりについて、歴史学、神道学の研究成果をふまえ、学際的視座で文献調査を行った。結果、「神賀詞」独自記述の背景に存在する氏族関係について新見を得るに至り、成果を論文として令和4年度に発表した。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の論文2編である。それぞれの論文で明らかにし得たことを以下に示す。

(1) 「『先代旧事本紀』「天璽瑞宝十種」の形成について 出雲の神宝献上を手がかりに」(査読あり)、東京大学国語国文学会『国語と国文学』通巻1174号(第98巻第9号)、令和3年8月

: 『先代旧事本紀』独自記事の一角を担う「天璽瑞宝十種」(以下、十種瑞宝)なる神宝について、「出雲国造神賀詞」奏上儀における神宝献上を手がかりに、その形成の意図を明らかにした。

十種瑞宝は『旧事紀』本文に複数の献上記事を有するなど不審な点を有するが、それらは、ナガスネビコ平定・即位・鎮魂祭起源という、天皇による支配権確立過程の要所に置かれている。このことは、当該神宝の献上が、玉体の健康維持・回復という次元に留まらず、国家秩序の安定にかかわるものであることを示唆する。

当該神宝の呪力は、物部一族の鎮魂呪術とかがわる。その本質は、内在魂の揺動や遊離魂の付着による医療呪術といったものではなく、荒ぶる神々の鎮定による国家秩序の確立という理念に基づくものであった。その鎮魂観は、「天神」を反映した神宝(フツノミタマ)によって祭祀者としての靈威を付与された存在(ウマシマチ後裔の物部氏)が、荒ぶる存在となりかねない神々(「地祇」)への鎮魂を適切に行い、その成功の復奏として、秩序化された「地祇」の靈威を神宝(十種瑞宝)に宿し、その献上によって天皇への靈威付与がなされる、という構図で把握できる。そこにあるのは、モノとなりかねない存在をカミとして秩序づけることで、玉体の平安が保たれ、国家の安泰にも繋がるという発想である。同様の鎮魂の理念は、出雲氏による「出雲国造神賀詞」奏上儀にもみいだすことができる。これはかつて物部氏の傘下にあった神門氏を介し、出雲氏の儀礼にうけつがれたものと想定される。

『旧事紀』編纂にあたっては、石上神宮および物部一族の顕彰が図られた。その目的を果たすため利用されたのが、物部氏同様に忠節と反逆の影をまといつつ、鎮魂術を反映した宮廷儀礼を行う出雲氏であったと考えられる。十種瑞宝はその出雲氏の宮廷祭儀を意識し、それを踏み台に造形されたとおぼしく、その背後には、鎮魂術の本流たる物部一族、および石上神宮の重要性の喧伝をはかる意図が存したものと考えられる。

(2) 「「出雲国造神賀詞」における出雲系四神鎮座の言説について 日置部およびその伴造氏族をてがかりに」東京大学国語国文学会『国語と国文学』通巻1190号(第99巻第11号)令和4年11月

: 当該論文では「出雲国造神賀詞」神話固有の言説である、四神鎮座記事について、その形成意図を検討し、「神賀詞」奏上儀礼の文脈に於ける意味について考察を行った。結果、以下の点を明らかにできた。

出雲国造神賀詞の四神鎮座段は、出雲から生まれた発想ではなく、大和に存在した三輪山・葛城山の信仰に由来するものであった。その発想が出雲国造の神話的言説の中に取り込まれたのは、大和葛城を本貫とし、鴨氏とかかわりの深い日置部およびその伴造氏族を媒としてであった。

日置氏は太陽祭祀、および地上の日である「火」の祭祀にもかかわる氏族であった。その日置氏の出雲定着は物部氏による県設置と深い関わりがある。物部氏の鎮魂概念は、日置氏を介して神門臣・出雲臣に伝えられ、「神賀詞」神話言説の形成に影響を与えたものと考えられる。また日置氏は、杵築大社のオホナムチ祭祀に関与する一方、出雲に定着する過程のなかでアヂスキタカヒコネの信仰を当地に伝える役も果たした。

現伝「神賀詞」の言説は、出雲国造が、中央神話の言説を利用しつつ、日置氏との関係の中で知り得た大和の信仰を、自氏の祖神アメノホヒ・アメノヒナトリの「媚び鎮め」の所産として取

り込んだ結果としてある。その言説は、奏上儀礼全体の文脈、すなわち、神宝（負幸物）によって祭祀者としての靈威を付与された存在（出雲国造）が、荒ぶる存在となりかねない神（オホナムチ）への媚び鎮め（祭祀）を適切に行い、その成功の復奏として「御禱の神宝」による靈威付与を行う、という構図のなかで意味を持つ。四神鎮座段は、太陽の運行とかかわる東西軸を意識したもので、日の御子の玉体に靈力を注入する儀式としての説得力を高める意味を有すると同時に、王権の起源から玉体を守護し続けてきた存在として出雲国造を顕彰する意味も有した。

平安期初頭は、「崇」による玉体の不安が高まった時代であった。その世相の中、出雲国造は、「崇」神を祭祀によって制御しうる資質を備えた存在として、自氏の顕彰を図ったと考えられる。

3年間の助成を得た結果、「出雲国造神賀詞」神話の言説がよってたつ思想基盤（鎮魂観）、およびそれを成り立たせた氏族関係（出雲氏、神門氏、物部氏、日置氏）について、新たな提言を示すことができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小村宏史	4. 巻 99-11
2. 論文標題 「出雲国造神賀詞」における出雲系四神鎮座の言説について 日置部およびその伴造氏族をてがかりに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京大学国語国文学会 『國語と國文學』2022年11月特集号（通巻1188号）	6. 最初と最後の頁 132-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小村宏史	4. 巻 98-9
2. 論文標題 『先代旧事本紀』「天璽瑞宝十種」の形成について 出雲の神宝献上を手がかりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学国語国文学会 『國語と國文學』2021年9月号（通巻1174号）	6. 最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------